ゆうことみゆきの
なるほど
アイヌ文化エッセイ

ソンコ de ソンコ

Vol.150

アイヌ文化のことをもっともっと話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で
執筆するソンコ(=お便り)形式のエッセイです。

今月のテーマ

アイヌ神謡集

村木美幸(アイヌ民族文化財団副理事長)

JR登別駅を降りて徒歩で約十五分、登別川沿いに大正十二年に出版された『アイヌ神謡集』の著者である知里幸恵の業績を紹介する「知里幸恵 銀のしずく記念館」があります。

幸恵は明治三十六年に登別に生まれ、六歳で祖母の金成モナシノウクと叔母の金成マツと旭川に移り住みます。言語学者の金田一京助が伝承者であった祖母や叔母を訪ねて来たのは幸恵が十五歳の時で、金田一との出会いをきっかけに、アイヌの物語をローマ字で表し、日本語訳を付けて筆録するようになります。大正十一年、金田一の勧めでカムイユカラ(神謡)の出版の話が持ち上がり、幸恵は十九歳の年に出版準備のため上京しましたが持病の悪化から、本の出版を待たずにその年の九月、短い生涯を閉じました。

カムイユカラは、カムイ(神々)が自身の体験談をサケヘと呼ばれる折り返しの言葉を節に乗せて語る物語。『アイヌ神謡集』は十三篇の物語からなる一冊で、中でも「〝シロカニペ ランランピシカン、コンカニペ ランランピシカン、〟アリアン レㇰポ チキ カネ…(〝銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに〟という歌を私は歌いながら…)」ではじまる「梟の神が自ら歌った謡 銀の滴降る降るまわりに」は有名。フクロウのカムイが人間の村の上を飛んでいると、子供たちがおもちゃの小弓で射ようとするので、金持ちの子が射つ金の矢をすり抜け、貧乏な子の木の矢に射たれます。カムイは貧乏な子の家に招かれ、泊まることに…。皆が寝静まった頃、カムイが家の中を右に左にと飛び回ると、小さな家は立派な金の家に、家の中は宝物や着物で埋め尽くされ、…と、いつも人間の国を見守っている、というお話。

イラスト/山丸ケニ

神謡集は、巻頭の序文も印象的で心が動かされます。「その昔、この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児の様に、美しい大自然に抱擁されて…平和の境、それも今は昔、夢は破れ…」と続きます。かつての暮らしぶりを想い、社会の中でのアイヌのあり様に憂い、そして未来へ希望を繋ぐ…、というもの。序文への共感は広がり、三十以上の言語に翻訳されているといいます。

『アイヌ神謡集』は、アイヌ自らが、先祖からの物語をローマ字で表し、日本語訳の表現も美しい、評価の高い本として、版を重ね、現在も読まれ続けています。皆さんも一度手に取って読んでみてはいかがでしょう。

次回のテーマは「サヨ(おかゆ)」
本田優子(札幌大学教授)が担当します。

ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間

JR白老駅から徒歩約10分

ウポポイPRキャラクター
「トゥレッポん」

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団副理事長。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■山丸ケニ(やまるけに):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団職員。ウポポイでアイヌ語体験プログラムを担当する。

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。